

河川分科会河川整備基本方針検討小委員会報告

(那珂川水系、那賀川水系、松浦川水系、網走川水系、矢作川水系、千代川水系、
天神川水系、重信川水系)

●小委員会開催

・那珂川水系、那賀川水系、松浦川水系

:平成18年1月20日、2月7日

・網走川水系、矢作川水系、千代川水系

:平成18年2月14日、3月2日

・天神川水系、重信川水系

:平成18年3月14日、3月27日

●各水系に関する主な委員意見、質問とこれに対する対応、説明

○那珂川水系

(基本高水のピーク流量及び計画高水流量)

【説明】 基本高水のピーク流量は、既定の計画である工事实施基本計画と同様に
基準地点野口において8,500m³/sとし、洪水調節施設と河道への流量配
分についても工事实施基本計画と同様に河道で6,600m³/s、洪水調節施
設で1,900m³/sとした。

(河道計画)

【意見】 下流部で大規模な河道の掘削が計画されているが、この掘削により塩水がより遡上し水道の取水等に影響を与えないのか。

【対応】 これについては、河道掘削にあたり、塩水が遡上しないよう側方への掘削とすることから塩水の遡上はないと考えているが、モニタリングしながら段階的に実施する旨を本文へ記述することとした。

(上下流のバランス)

【意見】 上流域は平成10年に甚大な洪水被害を受けたことを踏まえ治水対策を進める必要があるが、人口・資産が集積する下流部に過度の負荷がかからないよう上下流のバランスを考慮した整備が必要ではないか。

【対応】 流域内の人口・資産の状況や狭窄部により上流と下流が分断されているような河道の特性を考慮し、被害をできるだけ小さくする観点から、上下流のバランスを図り、段階的に整備を進めていく旨を本文へ記述することとした。

(広域的な水融通)

【質問】 那珂川における渇水時の塩水遡上による取水障害対策として霞ヶ浦導水事業により利根川から那珂川へ広域的な水融通を行うことになっているが、広範囲で発生することが多い渇水時において利根川からの導水が適切に行われるのか。

【説明】 霞ヶ浦導水事業の効果として、昭和62年以降、那珂川で渇水により取水

に影響のあった期間118日のうち、101日において利根川からの導水が可能であり、渇水時においても広域的な導水効果が期待できる。

○那賀川水系

(基本高水のピーク流量及び計画高水流量)

【説明】 基本高水のピーク流量は、既定の計画である工事实施基本計画と同様に基準地点^{ふるしゅう}古庄において11, 200m³/sとする。

洪水調節施設と河道への流量配分については、工事实施基本計画において河道で9,000m³/s、洪水調節施設で2, 200m³/sとしていたが、下流河道の特性を踏まえた上で、できる限り分担するよう検討した結果、工事实施基本計画より河道流量を300m³/s 増加させ下流河道流量を9, 300 m³/s とし、洪水調節施設で1, 900m³/s を分担することとした。

(既設ダムの有効活用)

【説明】 平成16年の度重なる洪水や平成17年の渇水など最近の状況を踏まえれば、那賀川水系では治水、利水上の課題が多く、その解決のため洪水調節施設による洪水調節や利水補給が必要な水系である。しかしながら上流で計画されていた細川内ダムが地元の理解が得られず平成12年にやむなく中止に至った経緯も踏まえ、既設ダムの徹底した有効活用を図っていくこととした。

【質問】既設の長安口ダムの有効活用を図るとのことだが、具体的にはどのような

活用を考えているのか。

【説明】 長安口ダムについては、洪水調節容量、利水容量の確保を図るため、放流ゲートの改造、既存施設では取水できない底水の活用のための放流施設の設置、貯砂ダムの設置や堆積土砂の浚渫等による堆砂容量の活用等が考えられる。

(河道計画)

【質問】 本川の下流区間は、川幅に比べ水深が深く交互砂州が発達して堤防付近まで深掘れしている状況であるが、この上流にある2つの既設の堰の統合、撤去により、下流河道の安定性に影響を与える可能性があるのではないか。

【対応】 堰の撤去にあたっては、下流河道の安定性に配慮して、平均河床高程度までの部分撤去とするとともに、引き続きモニタリングを行い必要に応じ適切に対応する旨を本文へ記述することとした。

○松浦川水系

(基本高水のピーク流量及び計画高水流量)

【説明】 基本高水のピーク流量は、既定の計画である工事实施基本計画と同様に基準地点松浦橋において3,800m³/sとする。

洪水調節施設と河道への流量配分については、工事实施基本計画において河道で3,400m³/s、洪水調節施設で400m³/sとしていたが、工事实

施基本計画策定以降の河床低下により河積が増大したことを考慮し、工事実施基本計画より河道流量を100m³/s 増加させ下流河道流量を3,500 m³/s とし、洪水調節施設で300m³/s を分担することとした。

(河道計画)

【意見】 下流部の計画高水流量について、河道状況の変化を考慮して計画高水流量を100m³/s を増加したとの事務局の説明について、河床状態は変動するものであり、必要な河積が確保できるようモニタリングも含めて河道管理を適切に行う必要がある旨を本文に記述すべき。

【対応】 河道の土砂動態をモニタリングしながらその結果を反映させた適切な維持管理を実施する旨を記述することとした。

^{きゅうらぎ}
(厳木ダムの効果)

【質問】 厳木ダムの流域面積は松浦川全体に占める割合があまり大きくないが、ダムの洪水調節効果を大きく見込みすぎているか。

【説明】 ダムの流域の占める割合は小さいものの、流域の中でも最も降雨量の多い地域であることから、ダムの洪水調節が効果的であり、その効果を適切に見込んでいる。

(その他)

【意見】 河口付近は唐津城や虹の松原などの良好な景観が形成されており、このような景観と調和した河川整備を進めていただきたい。

○網走川水系

(基本高水のピーク流量及び計画高水流量)

【説明】 基本高水のピーク流量は、既定の計画である工事実施基本計画と同様に基準地点美幌^{びほろ}において1, 200m³/sとし、洪水調節施設と河道への流量配分についても工事実施基本計画と同様に1, 200m³/s 全てを河道で配分することとした。

(計画高水)

【意見】 網走川と同様に下流に湖沼を有する高瀬川(小川原湖)については、基準地点を小川原湖とし、計画外力を基本高水のピーク水位としているが、網走川についても同様にすべきではないか。

【対応】 高瀬川は主たる洪水防御区域が小川原湖沿岸の低平地に存在することから小川原湖の水位が重要な指標であるのに対し、網走川は、網走湖より上流の美幌付近が主たる防御区域であることから基準地点を美幌とし、他の多くの河川と同様に計画外力を洪水流量とすることが適切である。また、網走湖の水位については計画高水の流量配分図に湖地点の計画高水位を記述することとした。

(水質)

【質問】 網走湖の水質は、環境基準の A 類型・IV 類型の COD 濃度3. 0mg/l に対し、5～8mg/l 程度と高い値を推移しており、環境基準の達成は困難なのではないか。

【説明】 COD 濃度については、北海道は寒冷地であり、枯死した植物が腐食しにくいため、腐植酸(フミン等)が多く流出することから、一般的に自然系の COD 負荷割合が高く、人為的な負荷の削減のみでは改善は難しい。なお、網走湖においては、頻発するアオコ、青潮の発生頻度の低減が最優先課題であり、地域と連携した全リン等の流域負荷の抑制や下流河道からの網走湖への海水の流入を抑制し、網走湖低層に形成された塩水層を低下させる対策が有効であることから、これらの対策を実施していく。

○矢作川水系

(基本高水のピーク流量及び計画高水流量)

【説明】 基本高水のピーク流量は、既定の計画である工事实施基本計画と同様に基準地点岩津において8, 100m³/sとし、洪水調節施設と河道への流量配分についても工事实施基本計画と同様に河道で6, 400m³/s、洪水調節施設で1, 700m³/sとした。

(河口部の流量)

【意見】 矢作古川の河口部の流量が表記されていないが、海域の影響も考慮した河道計画を策定する上で記述すべきではないか。

【対応】 矢作古川の流量については、河川管理者である愛知県の計画も踏まえ、900m³/sと記述することとした。

(河川環境)

【質問】 矢作川流域には矢作ダムを含め多数のダムがあり、これらのダムを含めた河川環境の現状と課題とそれに対する取り組み状況はどのようになっているのか。

【説明】 矢作川には矢作ダムの他7つのダムが設置されているが、矢作ダム以外はダム高も低く、年間の貯留水の回転率も高いことから比較的ダムの影響は小さいと考えられ、矢作ダムについてはダム湖からの放流水の冷水化や放流水の濁りの長期化の問題があるが、選択取水設備や分画フェンスの設置により洪水時も清水を確保する対策がとられ改善が図られてきていること、またダムの堆砂土砂を活用して干潟の再生に向けた取り組み等が行われている。

(東海(恵南)豪雨時の流木災害)

【質問】 平成12年9月の東海(恵南)豪雨の際に流木が大量に発生しているが、どのような状況であったか。

【説明】 矢作川上流域の降雨量の多い地域を中心に流木が多く発生しており、沢部での崩壊と合わせて大量の流木が流出したこと、矢作ダムには通常の年の約70倍の流木が流入したこと、豪雨の際には、樹齢や樹種による大きな差異はなく流出していた。

(その他)

【意見】 矢作川流域では、上下流の交流や古くから地域と連携した水質監視等の様々な取り組みが行われてきていることから、このような取り組みについて

本文へも記述すべき。

【対応】 上下流の交流や地域連携について本文へ記述することとした。

○千代川水系

(基本高水のピーク流量及び計画高水流量)

【説明】 基本高水のピーク流量は、既定の計画である工事実施基本計画と同様に基準地点行徳において6,300m³/sとする。

洪水調節施設と河道への流量配分については、工事実施基本計画において河道で5,500m³/s、洪水調節施設で800m³/sとしていたが、下流部の河道において最大限流下させうる流量を検討するとともに、上流部における洪水調節施設の計画を見直し、工事実施基本計画より河道流量を200m³/s増加させ下流河道流量を5,700m³/sとし、洪水調節施設で600m³/sを分担することとした。

(河道計画)

【意見】 中流部の用瀬付近の河道について流下能力を確保するため左岸側を大規模に掘削する旨の説明があったが、JR線や国道が併走している右岸側の嵩上げについても検討すべきではないか。

【説明】 流下能力の確保にあたっては、河道の状況や周辺の社会的状況等を踏まえ、引き続き検討の上、適切に実施する。

【意見】 河道内の樹木管理が適切に行われている全国的にも好例となる河川である。

○天神川水系

(基本高水のピーク流量及び計画高水流量)

【説明】 基本高水のピーク流量は、既定の計画である工事実施基本計画と同様に基準地点小田において3,500m³/sとし、洪水調節施設と河道への流量配分についても工事実施基本計画と同様に3,500m³/s 全てを河道で配分することとした。

(河道計画)

【意見】 流下能力の確保にあたっては、掘削だけでなく既設固定堰の改築が必要であり、実施にあたっては関係機関と十分調整、連携して適切に実施していく旨を本文に記述すべき。

【対応】 関係機関と調整、連携し、適切に流下能力を図る旨を本文に記述することとした。

(急流河川対策)

【意見】 天神川は急流河川であり、水衝部からの破堤氾濫による被害が発生した場合の対応等、急流河川で特徴的な記述をすべき。

【対応】 急流河川の過去の被災状況や特徴を踏まえたソフト対策を図る旨を記述することとした。

○重信川水系

(基本高水のピーク流量及び計画高水流量)

【説明】 基本高水のピーク流量は、既定の計画である工事実施基本計画と同様に基準地点出合において3,300m³/sとし、洪水調節施設と河道への流量配分についても工事実施基本計画と同様に河道で3,000m³/s、洪水調節施設で300m³/sとした。

(河道計画)

【意見】 重信川に石手川が合流する付近は川幅が狭く流下能力が不足しているが、沿川には市街地が形成されていることから河道の掘削により流下能力を確保することのことだが、河道特性により土砂が堆積しやすく、合流点であることも考慮すれば河道を拡幅すべきではないか。

【対応】 掘削後の河道における土砂の堆積は著しいものとはならず、今後維持掘削等の河道管理を適切に行うことにより流下能力の確保が可能と考えられるが、周辺の土地利用状況等も勘案して河道の拡幅についても検討する。

本文に川幅が狭く土砂が堆積しやすい支川合流部については土地利用状況等も踏まえて必要な拡幅も含めて河積を確保する旨を記述することとした。

(霞堤の保全)

【意見】 現存する霞堤について、都市化の進行により残すのが困難な状況のものが見られるが、できるだけ残していけるように土地利用の抑制といった政策

的、制度的な対応を考えていただきたい。また、浸水する箇所への情報提供が必要である。

【対応】 浸水が想定される区域についての情報を関係住民等に提供する旨を記載することとした。

(泉の保全)

【意見】 重信川流域では伏流水を利用した泉や霞堤において湿地が存在し、これらが良好な自然環境となっていることから、その保全について本文において記述すべき。

【対応】 地域住民や関係機関と連携しながら、泉や湿地の保全・再生に努める旨を記述することとした。